

# カナダの女流作家

## 近作に見る男女の関係

カナダの解放された女流作家達（それが正しい呼び方かどうかは別として）は、最近、男女両性の状態について特筆すべき結論を出し、世に問うている。

例えばマーガレット・アトウッドの「

レディ・オラクル（『女子言者』の意味）」

（一九七六年）。主人公はジョーンとい

う名のでっぶり太った娘。母親はほっそ

りとスマートで、階層的な上昇志向性が

強く、いつも欲求不満におちいつており、

白い長手袋をはめ、ときには深酒で酔っ払

う、そんな女である。ジョーンは、やが

て体重を半分ほどに減量することに成功

し、二重生活を送りはじめる。裏では、

金持で力強くしかも薄情な男達と、貧し

くほっそりと愛らしく、男に頼って生き

る女たちの、悪趣味な大衆恋愛小説を（

こっそりと偽名を使って）書く。そして

実生活では（これを生活と呼べるとして

の話だが）、一連の無気力な男たちと生

活する。第一の、少々滑稽に描かれた男

は、彼女の夫で、どことなく学者肌の、

たえず成功の望みのない理想（それ自体

望みがないわけではないのだが、アーサ

ーがかかわるとそうなってしまうのであ

る）を追いかけている人物。第二の男は

年上の亡命者で、ポーランドの弱小貴族

である。三番目は気違い、というか気違

いじみた芸術家気どりの男で、車にひか

れた都会の動物の死体を凍らせては、展覧会の陳列品を作っている人物である。

ジョーンの相手の男達は、ジョーンにとっても読者にとっても、どうしようもなく子供っぽく、わずらわしい。何とも場

ちがいないのである。一方、ジョーンの方は成熟しきった人物として描かれ、彼女の

叔母も大した人物ではないが、健全でヒューマンである。母親はほんの骨格し

か描かれていないが、それでもどこか興行きがある。それに対し、男の描かれ方

は平面的ですらなく、棒線画みたいだ。もちろん、子供っぽい女と同じように子供

供っぽい男も現実にはいる。自分の男らしさに自信満々の、大変滑稽感のある男

もいるが——デイケンズの作品にはわんざと出てくる——しかしこれが興味をひ

くためには、何よりもこうした人物が人間の

間的でなければならぬ。

ジョーンは、自分が死んだと見せかけて、結局は男たちをふり捨て、イタリア

に行く。小説の終りの方で、彼女は名前も顔もわからぬある若い報道記者と親し

くなるのだが、この男はもはや一次元的ですらない、つまり（読者には）見えな

い。解放された人間の結末は孤独である

——この小説はこう語っているようだ。

マーガレット・ギブスン・ギルボード

の「バターフライ・ウオード（蝶の病棟の

意味）」（一九七六年）は、この才能ある作家の処女作である。ギルボードは、

周囲から絶対的に隔離された女達、とくに精神病院の婦人病棟に収容されている

女達を書く作家だが、並みはずれた洞察

眼と共感を持ち、精密にこれを描き出し

ている。だが男の方は、不幸にして断片的だ。ギルボードの小説の中で最もすぐ

れているのは、男が全然出てこない作品である。たとえば「彼女の状態にしては

（Considering Her Condition）」などの作品における男は、たしかにあざやかな描

出ではあるが、傍観者としての存在ではない。彼女の書いたものの中で最も迫

力のない話の中では、主人公が父親とかおどおどした夫とか、とにかく男の

だ、これらの男は物の見方、反応の仕方が、精神病棟にいる女の条件反射のま

まなのである。とにかく、ギルボードの書く小説は迫力があり、読む者を不安に

落として入れる力を十分もっている。そこ

においては、両性間の溝というよりは、

感じやすい者（精神病者）と感じにくい者（正常人）との間の溝が問題となっ

ている。その溝は、蝶とこうもりとの間に

ある隔りと同じように、厳然として越え

ることのできない深淵である。

ミルナ・コスタシユ、メリンダ・マクラ

ッケンらの共著「独立した女たち（Her

Own Woman）」（一九七五年）は、一

連の女性とのインタビューをまとめたも

のである。インタビューの対象は、個人

としての業績を確立した女性たちで、書

き手は才能ある若い女性たちである。内

容は、面白いほど変化に富み、登場する

女性はいんなら解放された人々であるが、

かといって軍隊式に単色ではない。多く

は、特定の男性と満足できる互いに尊敬

しあう関係を持っている。多少なりとも

名の通った人達——前関係のジュディ・

ラマーシユ、陸上競技のスター、アビー

・ホフマン、労働運動のリーダー、マド

レーヌ・パレン、画家エスター・ワルコ

フ、小説家兼詩人兼批評家のマーガレッ

ト・アトウッド、カナダ・ラジオ界のト

ップーパーソナリティ、バーバラ・フラム

——と、無名の女性たち——インタビュ

ーアリーの母親イーディス・マクラッケン、

見事なまでに確信に満ちた若い女性キャ

スリーン（姓は明らかにされていない）、

歌手兼作曲家のリタ・マクニール、ラジ

オ局のドキュメント制作者バーバラ・グ

リーン——が登場している。

この本は各部分よりも、全体から浮か

び上ってくる性格が興味深い。登場する

女性の誰一人として、いわゆる犠牲者は

いない。ステレオタイプ化された男女の

あり方は実生活の中ではなく、悪しき芸

術の中の存在であるという、希望に満ち

た真実が、彼女たちのバイタリティと個

としての人格を通じて、読む者の胸に伝

わってくるのである。

どのインタビューもみなすぐれた内容

だが、とくにミルナ・コスタシユが相手

をしたキャスリーン、メリンダ・マクラ

ッケンが相手をしたエスター・ワルコフ、

エルナ・パリスが担当したバーバラ・グ

リーンのものが光っている。

以上見てきた作品は、カナダの最もす

ぐれた作家のかなりの部分が、真に独立

した女性であることを示しているといえ

よう。